

99%のためのフェミニズム宣言

シンジア・アルツァ

ティティ・バタチャーリヤ

ナンシー・フレイザー 共著

恵 愛由 訳／菊地夏野 解説



Feminism
for the
99%
A Manifesto

人文書院

99%のためのフェミニズム宣言 目次

マニフェスト——分岐点……………9

1 新たなフェミニズムの波がストライキを再構成する……………18

2 リベラル・フェミニズムは崩壊した……………27
——私たちは前に進まなければならない

3 私たちには反資本主義のフェミニズムが必要だ……………32
——99%のためのフェミニズム

4 私たちは社会全体の危機のさなかを……………38
——そしてその根源は資本主義にある

5 資本主義社会におけるジェンダー的抑圧は、社会的再生産が
利益目的の生産に従属していることに根ざしている……………46
——私たちはその順番を正しくひっくり返したい

6 ジェンダーに基づく暴力には多くのかたちがあり、
そのすべては資本主義と複雑に絡みあっている……………55
——私たちはそれらすべてと闘うことを誓う

7 資本主義はセクシュアリティを規制しようとする……………68
——私たちはそれを解放したい

8 資本主義は人種主義的・植民地的暴力から生まれた……………80
——99%のためのフェミニズムは反人種主義かつ反帝国主義である

9	資本による地球の破壊から脱するために闘う………	91
	——99%のためのフェミニズムはエコ社会主義である	
10	資本主義は本物の民主主義や平和と両立しない………	97
	——私たちの答えはフェミニスト的な国際主義である	
11	99%のためのフェミニズムは	
	すべてのラディカルな運動に反資本主義の反乱を呼びかける………	104
	あとがき………	110
	解説………	153
	訳者あとがき………	167

凡例

- 本書は Cinzia Arruzza, Tithi Bhattacharya, and Nancy Fraser, *Feminism for the 99%: A Manifesto* (2019, Verso) を訳出したものである。
- 原文中の引用符は、「」で示した。
- 原文中のイタリック体による強調箇所は、文脈に応じて、傍点、ゴシック体の太字で示した。
- 注は訳者と編集部による。

99%のためのフェミニズム宣言

はやくから道を指し示してくれた

カンピー・リバー・コレクティヴ¹

そしていま 新しい道を切り開こうとしている

ポーランドとアルゼンチンのフェミニスト・ストライキ活動家たちに

1

一九七〇年代のアメリカで活躍した黒人レズビアン・フェミニストの組織。設立者はバーバラ・スミス。日本では「コンパヒー」とも呼ばれるが、現地での発音は「カンピー」のため、そちらに準拠した。

マニフェスト

分岐点

二〇一八年春、フェイスブック社の最高執行責任者（COO）であるシエリル・サンドバーグは世界に向けてこう発言した。「すべての国と企業のうち半数が女性によって運営され、すべての家庭のうち半数が男性によって切り盛りされれば、状況はずっとよくなるでしょう」。そして「その目標を達成するまで、私たちは決して満足してはいけません」。企業コーポレートフェミニズムの主唱者として、サンドバーグはそのときにすでに女性経営者

マニフェスト

らが役員会の「内側に入りこむ」よう促すことで名声（かつ財力）を得ていた。アメリカの財務長官ラリー・サマーズ——ウォール街の規制を緩和した男性——の元首席補佐官であった彼女は、ビジネス界の荒波をくぐり抜けて勝ち取る成功こそがジェンダーの平等へとつづく王道なのだ、とすこしの懸念もなく力説した。

同じ年の春、闘争的なフェミニスト・ストライキがスペインを機能不全に追いこんだ³。五〇〇万人を超える参加者に支えられ、二四時間にわたるストライキを組織したウエルガ・フェミニスタの主導者たちが呼びかけたのは、「性差別的抑圧、搾取、暴力から解放された社会の実現」であり、「私たちに従順であること、服従すること、沈黙することを要求する家長制と資本主義の協力的体制に抵抗し、闘いを挑む」ことだった。マドリードとバルセロナの上に太陽が沈んだとき、フェミニスト・ストライキの参加者たちは世界にこう表明したのである——「この三月八日、我々は断固

として、すべての生産活動、また再生産活動を停止させる」。そして今後、「同じ労働に従事する男性よりも劣る労働条件や賃金を決して認めないと。

これら二つの声は、フェミニストの運動においてまったく逆の方向を示している。他方、サンドバーグや彼女と同階級に属する人々は、フェミニズムを資本主義の侍女であるとみなしている。彼女らが望むのは、職場での搾取と社会全体における抑圧を司る仕事、支配階級の男女によって等しく分担される世界である。これは支配の機会均等という特筆すべき展望であり、つまりは普通の人々に対し、フェミニズムの名の下にこう求めるのだ——あなたがたの労働組合を破壊し、あなたがたの親を殺すようドローンに命じ、あなたがたの子どもたちを国境沿いの檻のなかに閉じこめるのが、男性ではなく女性であることをありがたく思いなさい。こうしたサンドバーグのリベラル・フェミニズムとはまったく対照的に、ウエル

2 出生時に身体的特徴から名指される性（セックス）に対して、社会や文化のなかで構築された性。あるふるまいや役割が「男らしさ」や「女らしさ」と結びつけられるときに働く分類の力。

3 三月八日の国際女性デーに、スペイン全土で女性たちが職場および家庭での労働をすべてストップさせるゼネラル・ストライキを進行。スローガンは「女性がいないければ世界は止まる」。

ガ・フェミニスタの主導者たちは「資本主義に終焉をもたらす」ことを主張している。つまり、上司^{ボス}というものを生み出し、国境を設け、それらを警備するためにドローンを生産するシステムの終焉である。

フェミニズムのこの二つのヴィジョンを前にして、私たちは一つの分岐点に立っていることがわかる。そして、私たちの選択は人類全体に誰も予想のできなかったような結果をもたらすことになる。一方の道は、人間の暮らしが持続可能なかわからないほど悲惨なものになってしまう焼け焦げた地球へとつづいている。もう一方の道は、人間が見うるかぎりもっとも崇高な夢のなかで語られてきたような世界へと向かっていく。すなわち、富と天然資源がすべての人によって共有された世界、平等と自由がもはや渴望の対象ではなく、前提となった公正な世界へと。

これほどはつきりとした対比はない。それでもこの選択が急を要するのは、現時点では二つの中庸を行く道がないからだ。新自由主義（ネオリベラ

リズム⁴）に代わる選択肢を、私たちはまだ持っていないのだ。新自由主義とは、過去四〇年にわたって地球を席卷してきた、極めて略奪的かつ金融化された資本主義経済の一形態である。新自由主義は大気を汚染し、民主的統治の建前をことごとく嘲り、私たちの社会的許容度を極限まで押し拡げ、圧倒的多数の人々の生活環境を全般的に悪化させた。この資本主義の形態があらゆる社会的闘争により多くのものを背負わせ、ささやかな改革をしていこうとする地道な努力を、生存のための大規模な戦争へと変えてしまったのである。このような状況のなか、傍観者でいた時代はもう終わった。フェミニストたちは明確な立場を示さなければならない。地球が炎上しているというのに、私たちは「支配の機会均等」を求めつづけるのか？ それとも、ジェンダーの公平性を再考するのか？ ——現在の苦境を越えて新しい社会へと導いてくれる、反資本主義的な方法で。

このマニフェストは第二の道、すなわち私たちが必要かつ実現可能であ

4 本来は政府による個人や市場への介入は最低限にすべきとする「小さな政府」を進める自由主義の一つだが、実際には社会全体を競争原理で満たそうとする介入主義的な統治の側面が強い。公営事業の民営化、労働法の規制緩和、社会保障制度の縮小などを特徴とする。

ると考える道を進むための見取り図だと言える。今日、反資本主義のフェミニズムを構想できるようになった理由の一つとして、政界のエリート層に対する信用が世界中で崩壊しはじめていることがある。その被害者には、新自由主義を押し進めてきた中道左派や中道右派の政党——いまではかつての面影だけを残した、蔑まれた者たちだ——だけではなく、かのサンドバーグ・スタイルの企業^{コルゲイト}フェミニストの支持者たちも含まれており、彼女たちの「進歩的」な体裁はかつての輝きを失ってしまった。リベラル・フェミニズムは二〇一六年の米国大統領選挙で決定的な敗北を喫した。大々的に宣伝されたヒラリー・クリントン候補は、女性有権者たちの心を燃え上がらせることができなかった。これにはしかるべき理由がある。つまりクリントンは、エリート女性が高官へ昇格することと、圧倒的多数派の人々の暮らしを改善することのあいだに潜む深い亀裂を体現したのだ。クリントンの敗北は、私たちの目を覚まさせた。リベラル・フェミニズ

ムの崩壊が露呈し、左派からの突破口が開けたのである。リベラリズムの衰退が生んだ真空状態のなかで、私たちはまた別のフェミニズムを構築するチャンスを得ている。すなわち、フェミニストが取り組むべき問題とは何なのかという問いに、これまでとは異なる定義を与えるフェミニズムである。それは、これまでとは異なる階級的指向を持ち、急進的かつ変革の力を具えた、これまでとは異なる精神を有するフェミニズムである。

このマニフェストは、そのような「もうひとつの」フェミニズムを推し進める私たちの奮闘そのものだ。私たちは架空のユートピアを描くためではなく、公正な社会に到達するためにたどらねばならない道のりを明確化しようとして書いている。私たちは、なぜフェミニストたちがフェミニスト・ストライキの道を選択するべきなのか、なぜ私たちがほかの反資本主義運動や反体制運動と結末しなければならないのか、また、なぜ私たちの運動が99%の人々のためのフェミニズムにならねばならないかを説明す

るつもりだ。こうした方法——反人種主義者、環境活動家、労働や移民の権利活動家たちとつながること——によってのみ、フェミニズムは私たちが生きていくこの時代の困難に立ち向かうことができる。断固として「体制の一員になる」という教義や1%のためのフェミニズムを拒否することをもって、私たちのフェミニズムはほかのすべての人々のための希望の指針となりうるだろう。

現在のこのプロジェクトに乗り出す勇気を与えてくれたのは、闘争的なフェミニズム運動の新たな波だ。それは、働く女性に悲惨な結果をもたらし、いまでも血が噴き出すように信用を失いつづけている、かの企業フェミニズムではない。ましてや、少額融資によってグローバル・サウスで暮らす女性たちに「力を与える」の⁶だと宣言する、「マイクロクレジット・フェミニズム」でもない。そうではなく、私たちに希望を与えてくれるのは、二〇一七年と二〇一八年に世界中のフェミニストたち・女性たちが行

ったストライキである。これらのストライキと、それに協調していただいた展開しつつある数々の運動こそが、99%のためのフェミニズムにまず最初の命を吹きこみ、さらには現在の具体的な活動へとつなげてくれたのである。

5

主に南半球の発展途上国を指すが、北半球の先進国へ出稼ぎや結婚を理由に移住する者も多く、一概に地理の分布によっては北と南を分けられなくなっているため、より包括的な言葉としてグローバル・ノース/サウスを使っている。

6

抑圧下にある人々の生活を向上させたり、精神的に勇気づけること。リベラル・フェミニズムの文脈においては、「女性」が企業などにおける権力を得られるよう「力づける」ことを指す場合が多い。エンパワメントとも。

7

とくに発展途上国の貧困層や失業者など、銀行から融資を得られない低所得者を対象にして、無担保で小口資金を融資すること。一九七〇年代のバングラデシユのグラミン銀行が始まり。貯蓄や保険など対象範囲が広がったため、マイクロファイナンスとも呼ばれる。

1 新たなフェミニズムの波が ストライキを再構成する

近年のフェミニスト・ストライキ運動は二〇一六年一〇月、ポーランドから始まった。一〇万人以上の女性たちが国家による中絶の禁止に抵抗してストライキに踏み切り、行進したのだ。一〇月末には、徹底的な拒絶のうねりはすでに海を越えてアルゼンチンに波及し、そこでスト中の女性たちがロシア・ペレスの凶悪な殺人事件⁸に対して闘いを宣言した――

8 二〇一六年一〇月八日、当時一六才だったルシア・ペレスが、暴行されたのち殺害された事件。女性を標的とした殺人（フェミサイド）⁸。だとして、抗議運動が世界各地に広まった。

もう一人も欠けてはならない
二・ウナ・メノス。波はすぐにイタリア、スペイン、ブラジル、トルコ、ペルー、アメリカ、メキシコ、チリ、そしてさらに数十カ国もの国々に広がっていった。路上から始まったこの運動はまたたく間に職場や学校へと押し寄せ、最終的にはショー・ビジネスやメディア、そして政治にいたるまでの目まぐるしい世界を巻きこんでいった。二〇一六年以来、運動のローガンは世界中で力強く鳴り響いてきた。たとえば#NosotrasParamos、#WeStrike、#VivasNosQueremos、#NiUnaMenos、#TimesUp、#Feminism4the99⁹などがそうである。はじめは波紋だったものが波になり、その波が巨大な潮の流れを生んだ。それは世界的なフェミニズム運動の新たな潮流であり、既存の協力体制を揺さぶって政治地図を描き直すまでに勢いを増していく可能性を秘めている。

あくまで国単位での活動であった一連の運動は、二〇一七年三月八日に境に国境を越えた運動となった。その日、世界中の運動の主導者たちが共

9

それぞれ「私たちはストライキする」「私たちは生きていたい」「もう一人も欠けてはならない」「もう終わりにしよう」などの意味。いずれも#MeTooと同じく、性暴力やジェンダー格差への反対を呼びかけるハッシュタグ。

1 新たなフェミニズムの波がストライキを再構成する

にストライキすることを決めたのだ。この大胆な一手によって、彼（女）らは国際女性デーをふたたび政治化した。薄っぺらな脱政治化のまやかし——ブランチャやミモザ、ホールマーク¹⁰のメッセージカード——を払いのけ、ストライキの参加者たちは、国際女性デーのすっかり忘れられていた歴史的ルーツが労働者階級や社会主義フェミニズムにあることを思い出させた。彼（女）らの活動は、二〇世紀前半の労働者階級の女性たちの動員活動——典型的には、その多くがアメリカに住む移民やユダヤ系の女性たちによって指揮されていたストライキや集団デモのこと——に似た精神を感じさせる。こうした運動が、かつてアメリカの社会主義者たちを感化し、最初の全米女性デーを発案させたのである。また、ドイツの社会主義者ルーズ・ジーツ¹¹とクララ・ツェトキン¹²にも影響を与え、国際女性労働者デー提唱への道を示したのである。

そうした闘争精神をよみがえらせることで、今日のフェミニスト・ストライキは、自らのルーツが労働者の権利と社会的公正をめぐる過去の苦闘にあることを再認識する。海や山、大陸によって、また同様に国境や有刺鉄線、壁によって隔てられた女性たちを団結させ、彼（女）らはあのスローガン、「連帯はわたしたちの武器だ (Solidarity is our weapon)」に新しい意味合いを与える。内と外を分ける、数々の記号的な壁によって生まれる分断を打ち破り、それらストライキは「女性の力」が持つ膨大な政治的可能性を立証している。その力とは、世界を支える有償・無償の労働に従事する者たちの力のことである。

しかしそれだけではない。こうして芽吹いてきた運動は、ストライキの新しい手段を發明し、ストライキという形式そのものに新たな政治性を与えている。労働からの撤退に行進やデモ、中小企業の閉業、封鎖、そしてボイコットなどを組み合わせることで、こうした運動はストライキ行為のレパートリーを多様なものにしつつある。ストライキの手段にもかつては

10 アメリカでもっとも古く最大のグリーティングカード会社。

11 Luise Zietz (1865-2892) ドイツの社会主義フェミニスト。女性ではじめてドイツ社会民主党執行部を担った。

12 Clara Zetkin (1857-1933) 「女性解放運動の母」と呼ばれ、社会主義の立場から女性の解放運動を主導。ローザ・ルクセンブルクなどと急進的なマルクス主義集団、スバルタクス団を結成。

1 新たなフェミニズムの波がストライキを再構成する

幅広い選択肢があったが、数十年にわたる新自由主義からの攻撃によってその幅は劇的に狭まっていった。同時に、この新たな波はストライキを民主化し、その対象範囲を大きく拡げていく——なかでも、何をもって「労働」とするかという、その根本的な考えそのものを押し拡げることによって。女性たちのストライキ運動は、有償労働のみに「労働」のカテゴリーを限定することなく、家事、性交渉、そして笑顔からも撤退する。資本主義社会における、ジェンダー化された無償労働が担う必要不可欠な役割を可視化することによって、資本主義が利益を得つつも対価を支払わないでいるそれらの行為に光を当てるのである。また有償労働についても、ストライキ活動家たちは、何を労働問題とするかということを広い視野で捉えてみせる。賃金と労働時間のみで心を砕くのではなく、彼女らはセクシユアル・ハラスメントや性的暴行、性と生殖をめぐる正義を阻む障壁、そしてストライキする権利を制限しようとする力にも目を向ける。

結果として、この新たなフェミニズムの波は「アイデンティティ・ポリテイクス（アイデンティティ政治）」と「クラス・ポリテイクス（階級政治）」間のしぶとい対立、分断を生みやすい対立を打破する可能性を秘めている。なぜなら、「職場」と「私生活」が地続きであることを示し、課題をそれぞれの「場」に留めることを拒否するからだ。そして、何を「労働」と捉え、誰を「労働者」とするかということを再定義することによって、資本主義による女性の労働——有償・無償いずれにおいても——の構造的軽視に抵抗するからだ。結局のところ、女性たちのストライキをつうじたフェミニズムが見つけているのは、まだ前例のない、新たな階級闘争の様相なのだ。それは、フェミニスト的、国際主義的、環境保護主義的、そして反人種主義的な階級闘争である。

この介入は完璧なタイミングで行われた。ストライキに象徴される女性たちの闘志が噴出したのは、製造業の中心である、かつては強い力を持つ

1 新たなフェミニズムの波がストライキを再構成する

13

「性と生殖に関する健康と権利（リプロダクティブ・ヘルス/ライツ）」が守られること。子どもを産む権利・産まない権利をはじめ、性教育、避妊、中絶、性器切除、生殖医療など、性と生殖に関連する幅広い問題が含まれる。

ていた労働組合が深刻なまでに弱体化したときだった。階級闘争を活性化させるため、活動家たちはまた別の土俵に目を向けた。それは医療、教育、年金、住宅に対して新自由主義が働いた暴挙である。彼女たちは、労働者階級・中産階級の生活水準を四〇年にわたって脅かしてきた、こうした資本の別の流れを標的に据え、人々と共同体を支えるのに必要な労働やサービスに目を向けてきた。現在私たちが闘争的なストライキや反撃の多くを見出すのは、まさにこの「社会的再生産」の領域なのである。アメリカの教師たちによるストライキの波からアイルランドにおける水道民営化との闘い、インドで清掃業に従事する不可触民¹⁴のストライキにいたるまで——そのすべてを女性たちが先導し、あるいは力づけていた——労働者たちは社会的再生産をめぐる資本の暴挙に抵抗している。公式に国際女性ストライキ (International Women's Strike) 運動と提携していたわけではないにせよ、これらのストライキと女性たちの運動には多くの共通点がある。彼(女)

14

インドのカースト制度外に位置づけられる被差別民のことを指す。とくに下水など清掃業に従事する彼(女)らの衛生・健康状態はひどく、死者も続出するなど問題視されている。

らもまた、生活をつづけていくのに不可欠な仕事の賃上げを求めながら、その仕事による搾取に反対しているのだ。そして彼(女)らもまた、賃金の要求と職場での要求を、社会事業への公共支出増加の要求と結びつけているのだ。

さらにアルゼンチンやスペイン、イタリアなどの国では、女性たちのストライキをつうじたフェミニズムは緊縮財政¹⁵に反対する組織から広く支持を得てきた。女性や、ジェンダーによる規定に準じない人々だけでなく、男性も、学校や医療、住宅、交通機関、環境保護などへの補償の打ち切りに対する大規模なデモに参加した。このような「公共財」に対する資本の暴挙に加担しないことを通して、フェミニスト・ストライキは我々の共同体を守るための包括的な取り組みのきっかけとなり、その雛形を作ってくれた。

つまるところ、闘争的なフェミニスト運動の新たな波が実現しようとし

15

福祉・医療・教育などの社会支出の見直しを進め、政府の歳出削減をめざす財政のこと。新自由主義的な政策とされる。

1 新たなフェミニズムの波がストライキを再構成する

ているのは、パンとバラの両方を求めるという不可能にも思える考えなのだ。それは、数十年にわたって新自由主義が我々のテーブルから奪っていったパンだけではなく、反対の高揚感のなかで我々の精神性を育んでくれる美ささえも求めることなのである。

2 リベラル・フェミニズムは崩壊した

— 私たちは前に進まなければならない

主流メディアでは、フェミニズムという言葉自体がリベラル・フェミニズムを意味するのだとして同一視されつづけている。しかしリベラル・フェミニズムは、解決策を提示することはおろか、それ自体が問題の一部なのである。グローバル・ノースにおける経営者層に集中するそれは、「体制の一員になる (leaning-in)」ことと「ガラスの天井を打ち破る (cracking the

あとがき

途上からの出発

フェミニスト的なマニフェストを書くというのは、身のすくむような仕事である。今日それに挑戦する人は誰でも、マルクスとエンゲルスが残した知見の上に——そしてその影に——立たなければならない。彼らが一八四八年に出版した『共産党宣言』は、印象深い一文から始まる。それは、「ヨーロッパに幽霊が出る」だ。この「幽霊」とはもちろん共産主義のこ

とであり、発展していくであろう労働者階級の闘いの頂点として描かれた革命的プロジェクトを指す。結束し、国際的な動きへと広がり、世界史的勢力に変容して、共産主義は、最終的には資本主義を滅ぼすのだと考えられていた。さらには、すべての搾取を、支配を、疎外を。

私たちはこの前例から大いに刺激を受けた。とりわけ、現代社会における抑圧の究極的な基盤は資本主義である、ということが正しく認識されていたからだ。しかしそれは私たちの仕事を複雑なものにもした。『共産党宣言』は文学として傑作であるだけでなく——それゆえに追隨することが難しいだけでなく——二〇一八年は一八四八年とは違うからだ。たしかに、私たちも社会的・政治的激変のなかを生きている。そしてその激変を、資本主義の危機として理解している。しかし今日の世界は、マルクスやエンゲルスが生きていた時代よりもずっとグローバル化されており、この世界を横断する大変動は決してヨーロッパに留まりはしない。同様に、現代の

私たちも階級同士の対立に加え、国や人種・民族、宗教をめぐる争いに対峙しているが、私たちの世界は彼らが知ることもなかった政治的分断線を内包している。それは、セクシュアリティ、障害、生態系である。また、ジェンダーをめぐる闘争は、マルクスやエンゲルスが想像だにしなかった広がりや激しさを持っている。かつて以上に亀裂が入り、不均一な政治的状況を前に、世界的に結束した革命の勢力を思い描くことは容易ではない。

さらに、後につづく者として、私たちは解放をうたう運動が誤った方向へ向かってしまう例をたくさん知っている。そこには、マルクスやエンゲルスが気づけなかったことが多く含まれているだろう。我々が受け継いだ歴史的記憶のなかには、ボリシェビキ革命が専制主義のスターリン政権へと暗転していったことも含まれている。ヨーロッパの社会民主主義が国粋主義と戦争に屈服した歴史や、グローバル・サウス全体における反植民地主義の闘争のあとに大量の独裁政権が生まれた歴史も。私たちにとって特

に重要な意味を持つのは、この現代において復活した解放運動が新自由主義を育む勢力にアリバイを提供していること、またその仲間となっていることだ。昨今のこうした経験は、左派のフェミニストたちをやりきれない思いにさせた。私たちは、運動の主流派となるリベラルな潮流が、我々の理念をごく少数が上昇するための能力主義へと矮小化してしまう過程を見たのだ。

この歴史こそ、私たちがマルクスやエンゲルスとは異なる展望を抱く理由なのである。彼らが生きていたのは資本主義が比較的若い時代だったが、私たちは年を重ねた、したたかなシステムに対峙しているのであり、現在の資本主義は懐柔や強制においてはるかに熟達している。また、今日の政治の地平にはたくさんの罨が仕掛けられている。この「マニフェスト」で説明したように、フェミニストにとってもっとも危険な罨は、現在の政治における選択肢が二つしかないと思いきむことだ。その一つは、新自由主

義の「進歩的」な一形態であり、エリート主義かつ企業版のフェミニズムを普及させ、貪欲な少数独裁の企てを解放の虚構で覆い隠している。もう一つは、新自由主義の保守的な一形態で、前者と同様の金権政治をほかのやりかたで求めようとする——女性嫌悪や人種主義の言葉を並べて、「大衆」からの信任を得るのである。明らかに、これら二つの勢力は同一のものではない。しかしこの両方が、真に解放的な大多数のためのフェミニズムにとって最大の敵なのである。加えて、これらはたがいに補助しあう関係にある。進歩派の新自由主義は保守反動派のポピュリズムが勢いに乗るための基盤を作り、いまでは頼りになるもう一つの選択肢として、自らの立場を築きつつあるのだ。

私たちの「マニフェスト」は、この争いにおいてどちらの側にもつかないことをまず示している。資本主義の危機に対峙するにあたって、戦略の選択肢をたった二つに限定しようとするメニューを私たちは受け取らない。

そうではなく、私たちはその両方に対する代替案を推し進めるためにこれを書いた。現在の危機に対処するだけでなく「解決」することに心を砕き、解放に向かうための別の潜在的な可能性を可視化し、実行可能なものとして提示しようとしたのだ。その可能性は、連携する二つの勢力が覆い隠しているものである。私たちはリベラル・フェミニズムと金融資本の癒着を断ち切ることを決意し、別のフェミニズムを提唱した。それが、99%のたぬ、フェミニズムである。

このプロジェクトに着手したのは、二〇一七年のアメリカ合衆国の女性たちが起こしたストライキ運動において共に協力しあったあとのことだった。それより前から、私たちはそれぞれが資本主義とジェンダー的な抑圧の関係について書きつづけていた。シンジヤ・アルツァはフェミニズムと社会主義の緊迫した関係について、歴史的にも理論的にも検証しながら説明してきた。ティティ・バタチャリヤは社会的再生産が階級や階級闘争

といった概念に対して持つ意味を理論化してきた。ナンシー・フレイザーは資本主義とその危機——社会的再生産の危機もその一翼を担っている——をより大きな観点で捉え直してきた。

こうして着眼点がそれぞれ異なっているにも関わらず、私たちが協力してこの「マニフェスト」を書きあげたのは、現在の難局について共通の理解を持っていたからだ。我々三人全員が、現在のこの瞬間をフェミニズムと資本主義の歴史において非常に重要な岐路であると認識している。その岐路は介入されることを求めており、その契機を与えてくれている。このような文脈のなかで、私たちがフェミニスト的なマニフェストを書くことと決めたのは、ある政治的な目的を持つてのことだった。それは、この現状に助け舟を出し、進路の修正を行うことだ——この政治的混乱の時代において、フェミニスト的闘争が向かうべき方角を指し示すことだ。

資本主義とその危機を捉え直す

この「マニフェスト」が向き合っている難局は、危機として理解されるべきだろう。しかしその言葉は、ただ物事がうまくいっていないとか、そんな大雑把かつわかりやすい意味で用いられているのではない。現在の災難と苦しみは恐るべきものだが、私たちに「危機」という言葉を使わせるのはもつと恐ろしい事実だ。それは、今日私たちが遭遇する数えきれないほどの災難がたがいに関連しているという事実であり、それが偶然などではないということである。私たちが被る災難は、それらすべてを貫く一つの社会構造に起因している。その社会構造は、それ自体の構造的力学によって、偶然ではなく必然的に災難を生み出している。

私たちの「マニフェスト」はこの社会構造を資本主義と名づけ、現在の危機を資本主義の危機として特徴づける。しかし私たちはこれらの言葉を一般的な意味で理解しているのではない。フェミニストとして、私たちは

資本主義が単なる経済活動のシステムではなく、もっと大きいものであると認識している。資本主義は、公的な経済を支えている明らかに「非経済的」な関係性や慣習を包みこむ、一種の制度化された社会秩序だと言える。資本主義が公にしている制度——賃金労働、生産、交換、融資——の影に、それらが持続するためにはならない条件や支えがある。それは家族や共同体、自然、領域国家、政治的組織、市民社会であり、なによりもさまざまな量、さまざまなかたちでの無償労働や搾取された労働である。そこには社会的再生産を司る仕事も多く含まれており、いまだにその大部分を女性が担っている。報酬がないこともしばしばである。これらもまた、資本主義の構造的要素だと言える——さらには、そこで生まれる闘争のための土俵でもあるだろう。

資本主義をこのように広い視野で捉えることは、私たちの「マニフェスト」が提示する、資本主義の危機の大局的な見方につながっている。断続的な市場の暴落や倒産の連鎖、大量失業といった事態を引き起こす資本主義特有の性質を否定はしないが、私たちは資本主義がまた別の性質をはらんでいることも認識している。それは「非経済的」な側面における数々の矛盾であり、危機を引き起こしやすい傾向だと言える。たとえば、生態学的矛盾がある。すなわち、自然を単にエネルギーや原料を垂れ流す「蛇口」のようなものとして、あるいは廃棄物を吸収してくれる「シンク」のようなものとして矮小化してしまう——そんな自然のどちらの能力も、資本は補填しないまま自由に利用している——資本主義の特質のことだ。その結果、資本主義社会は、その構造上どうしても共同体を維持するための居住地を不安定な状態に追いやり、生命を維持するための生態系を破壊する傾向を持つのである。

同様に、この社会形態は政治的矛盾をはらんでいる。それはつまり、政治の適用範囲を制限し、生死に関わる根本的な問題を「市場」の支配下に

委ねてしまう特質である。同時に資本主義は、国民に仕えるべき国家機関を資本の従士に変えてしまう。こうした構造上の理由から、資本主義は民主的な願いをくじき、我々の権利や公権力を空洞化し、暴力的な抑圧や終わらない戦争を生み出し、統治を危機におとし入れる傾向にあるのだと言える。

最後に、資本主義社会は社会的再生産の矛盾もはらんでいる。それは「無料」の再生産労働をできるかぎり資本の利益のために利用する特質であり、補填については一切無視することを指す。その結果、資本主義は周期的に「ケアの危機」を引き起こすのである。女性は疲れ果て、家庭は踏みにじられ、社会のエネルギーは限界点まで酷使される。

言いかえれば、私たちの「マニフェスト」における資本主義の危機とは、単に経済的なものであるだけでなく、生態学的な危機であり、政治的な危機であり、社会的再生産をめぐる危機でもあるということだ。さらに、そ

のすべては一つの根幹に帰結するのである。それは、自らの必要不可欠な背景条件——資本が支払おうとしない再生産の対価——にただ乗りしようとする資本の本質的な傾向である。その背景条件には、排出された炭素を吸収してくれる大気的能力や、財産を保護したり反乱を鎮めたりお金を安全に保管してくれる政府の能力、そして我々にとってもっとも重要な、人間を育み、生き長らえさせてくれる無償労働などが含まれている。これらなしには、資本は「労働者」を搾取することも、うまく利益を蓄積することもできないだろう。けれど、こうした背景条件なしでは存続できないのが資本主義であるとするならば、それらの背景条件を否定するの他ならぬ資本主義の論理なのだ。搾取した自然や公権力、社会的再生産に対してまっとうな対価を支払わなければならない場合、資本の利益はもはや消えてなくなるくらいに減少してしまうだろう。利益の蓄積が危ぶまれるくらいなら、それを可能にする前提条件を自ら食い潰すほうがましだというのだ！

以上のことから、私たちの「マニフェスト」はこのような前提に立っている——資本主義は、公的な経済活動から生じる矛盾に加え、さらに多くの矛盾をはらんでいる。「平常」時なら、危機に陥りやすいこのシステムの傾向も多かれすくなかれ潜在的なものに留まり、使い捨て可能・無力であるともなされている人々だけが苦しむことになるだろう。しかし、現在は平時ではない。今日、資本主義のすべての矛盾はその限界点に達している。ほとんど誰も——1%の例外を除いて——政治的混乱や経済的不安、社会的再生産の欠乏の影響から逃れることはできない。そして言うまでもなく、気候変動がこの惑星に生きるすべての生命を脅かしている。また、以下のような認識も広まりつつある。つまり、こうした破壊的な展開は深いところで絡みあっており、それぞれを切り離して解決することはできないという認識である。

社会的再生産とはなにか

私たちの「マニフェスト」は今日の危機のあらゆる側面に対処しようとするものである。しかしそのなかでも、ジェンダーの非対称性と構造的につながっている社会的再生産の側面に特別の関心を寄せている。よって、もうすこし踏みこんだ質問をさせてほしい——社会的再生産とは、厳密には何なのだろうか？

「ルオ」の例について考えてみよう。ルオ（姓以外非公表）は台湾人の母親で、二〇一七年に息子に対して訴訟を起こした。その内容は、彼の養育に費やした時間と費用に対して賠償金を払うことを求めるものだった。ルオは二人の息子をシングルマザーとして育てあげ、その双方を歯学部に入学させた。それに対する返礼として、彼女は息子たちに自分の老後の面倒を見てほしいと考えていた。息子のうち一人がその期待を裏切ったとき、彼女は彼を訴えたのだった。台湾の最高裁判所は、その息子にアメリカドル

あしがき

れ、連帯によってつねに新しく築き直される普遍主義である。

99%のためのフェミニズムは反資本主義をうたう不断のフェミニズムである——平等を勝ち取らないかぎり同等では満足せず、公正を勝ち取らないかぎり空虚な法的権利には満足せず、個人の自由がすべての人々の自由と共にあることが確認されないかぎり、私たちは決して既存の民主主義には満足しない。

解説

菊地夏野

1 本書について

本書は既に二五か国で翻訳されている *Feminism for the 99%: A Manifesto* (Verso Books, 2019) の日本語訳である。著者はアメリカを主な拠点とする三名のフェミニストである。

シンジヤ・アルツザは、ニュー・スクール・フォー・ソーシヤル・リサーチ哲学科教員であり、プラトン等の哲学及びフェミニズム理論とマルクス主義の研究者である。イタリア生まれで、「一三歳の頃から活動家だった」と語っている。

ティティ・バタチャリヤは、パデュー大学教養部教員であり、南アジアの歴史およびフェミニズム、マルクス主義を専門とする。インド系有色女性として、多様な社会正義の問題について発言を続けている。

ナンシー・フレイザーは日本でも著名で、ニュー・スクール・フォー・ソーシヤル・リサーチ政治・社会科学科教員であり、政治哲学、正義論、批判理論等を率いている。彼女は一九九〇年代から

日本でもフェミニズムの理論家として知られているが、近年特に新自由主義の政治を批判的に分析し、大きな影響を与えている。そのフレイザーが本書について、「これはわたしが一九六八年世代の活動家として初めて書いた政治的な文章である」と語っているのは興味深い。その理由を、状況があまりに厳しく、より多くの人々に現在支配的なものとは異なる新しいフェミニズムを伝える必要を感じたからだと述べている。

2 世界的なフェミニズムの高場のなかから

厳しい状況というのは、二〇世紀終わりから、共産主義圏は雪崩を打って崩壊し、世界をグローバル市場が覆い出した。あらゆるものが商品化され、規制を緩和されたマーケットは人々を競争の中に放り出し、世界中の労働者の環境は悪化した。人々の格差は拡大する一方だが、弱者を保護するはずの国家や地方の公共セクターはマーケットの競争を後押しする存在に変質した。社会運動やメディア、学問などの権力を批判する役割を持った存在は弱体化し、逆に競争や排除を補完する制度と見まごうばかりである。

このような新自由主義の展開に対して、様々な人々が抵抗の努力を続けている。例えば「99%」を掲げたオキュパイ（占拠）運動は二〇一一年に始まった。「1%の富裕層と99%のわたしたち」の格差を象徴するニューヨーク・ウォール街の一画、ズコッティ公園等を占拠することで、金融支配に異議

申し立てを行い、全米各地、さらに世界中に広がった。他にも世界社会フォーラム、「アラブの春」、ヨーロッパの反緊縮運動など相互に影響を与え合いながら各地で抵抗運動が起きている。

このような運動の中で、フェミニズムの主張は見え隠れしながらも必ずしも常に中心化はされなかった。

フェミニズムは二〇〇〇年代以降、日本だけでなく多くの国でバックラッシュにぶつかり、また若い世代のフェミニズム離れを意味する「ポストフェミニズム」もあり、潜在化していた。一方で二〇一〇年代には、SNSの普及もあり、「ポップな」装いを持ったフェミニズムがメディアに取り上げられるようになった。それがさらに顕在化したのが、二〇一六年一月のアメリカの富豪ドナルド・トランプの世界中を驚かせた大統領選当選にさいしてだった。トランプは、女性差別や人種差別の発言を繰り返し、話題となることで注目をさらし、人気を勝ち取った。彼が意外な当選を果たしたことで、人々がこれからのアメリカと世界の状況に不安を深める中、女性たちの大規模な抗議、ウイメンズ・マーチが行われたのだ。

二〇一七年一月のトランプ大統領の就任式の翌日（一月二日）、全米五百以上の都市で数百万人規模の大きなデモが行われ、アメリカ史上最大のデモだとされている。これは世界中で報道され、フェミニズムの存在感を知らしめた。

マスメディアはこれによってフェミニズム運動を代表させようとするが、本書はその認識に挑戦し

ている。

ウィメンズ・マーチの翌月、著者三人およびリンダ・オルコフ、バーバラ・ランスビー、ラスメア・オーデ、ケアンガーヤマチャ・テイラー、アンジェラ・デビスの八人が三月八日にストライキをすることを呼びかけた。これは「国際女性デー」として知られている同日に、世界中の女性がストライキをすることへの誘いである。

国際女性デーは今では各国政府や大企業も祝賀するほど普及しているが、起源は二〇世紀初めの社会主義の運動に根ざしている。一九〇八年のこの日、一万五千人の衣料品産業の女性労働者たちが賃上げや労働時間短縮、参政権を求めてマンハッタンの中心を行進した。その多数は移民女性だった。その翌年、織物労働者の移民女性たちがストライキを行い、警察や経営者の弾圧にあった。これを受けてドイツの社会主義者クララ・ツェトキンらが一九一〇年に「国際女性労働者デー」の組織化を行った。

そのような歴史の上で、近年、ポーランドで二〇一六年に中絶禁止の政策に反対して女性たちが抗議ストライキを行い、同年アルゼンチン始めラテンアメリカ諸国でフェミサイド（女性をターゲットとする殺害）に対する抗議運動（Ni Una Menos）が大規模に広がった。これを受けて、二〇一七年の女性デーにストライキをすることが呼びかけられている中、アメリカで著者らが立ち上がったのである。

著者らはウィメンズ・マーチの意義を認めた上で、問題をより焦点化し、トランプ個人の女性嫌悪

にとどまらない長期的な女性に対する攻撃に目を向けなければならないとしている。最終的に、ウィメンズ・マーチの呼びかけ人も合流して、二〇一七年のストライキは実施された。ちなみにアメリカでは「女性のいない日（A Day Without a Woman）」と呼ばれている。

その後、二〇一七年一〇月から「#MeToo」が世界的に盛り上がり、「フェミニズムの流行」の一角を成していくが、アルッザはウィメンズ・ストライキは「MeToo」への応答でもあると語っている。性暴力は多くの女性の日常的な問題であり、ストライキは、孤立しがちな性暴力被害者に対して、共同的な応答を行う試みだとしている。

本書はこのストライキ（International Women's Strike）への継続する呼びかけである。本書がリベラル・フェミニズムへの批判から始められているのは、この背景から理解される必要がある。近年のメディアでの「フェミニズムの流行」を読み解くためには、ウィメンズ・マーチとウィメンズ・ストライキの関係を見極めなければいけない。日本の報道ではこれらはほとんど同一視されている。もちろん実際の運動の中では両者は結びついており、その結びつきに力がある。しかし理論的には、腑分けしななければならない問題があり、それは、フレイザーが「資本主義の侍女」となぞらえたフェミニズムの出現だ¹。

「リーン・イン・フェミニズム」は女性も競争に参入し、そこで高い生産性を上げ、マーケットや国家に「貢献」することがフェミニズムの目標だとする。これが問題含みなのは単に抑圧的な価値観で

あるというだけでなく、新自由主義を正当化するからである。競争や効率といった新自由主義的価値観は、必ずしも容易には受け入れられないが、「多様性（ダイバーシティ）」という言葉で「女性の成功」と結びつけられると輝きを増す。「リーン・イン・フェミニズム」はそうして社会に新自由主義を浸透させる効を奏し、同時にまたフェミニズムを歪めてしまう。そうすればフェミニズムは人々を解放に導くどころか、より追い詰める道具となる。

そのため、著者らは、「リーン・イン・フェミニズム」に代表されるリベラル・フェミニズムを批判し、そうではないフェミニズムをわたしたちに伝えようとしている。そして、ウイメンズ・ストライキの運動は、問題がトランプ大統領のみにあるのではないと考え、トランプの政治はより大きな問題の「症状」だという認識を持っている。

この認識は、近年フレイザーが論じている「進歩的なネオリベリズム」と関係している。フレイザーによれば、トランプの勝利は「普通の人々」の反乱を意味している。この数十年間のネオリベラル化の進展によって、経済は金融化し、これまで社会のマジョリテイを占めていた製造業労働者や農業労働者等は居場所を失った。例えばビル・クリントン政権は、脱工業化を進めながらウォール街を支援し、「多様性」や「解放」を旗印に女性や若者の権利、多文化主義といった主張を打ち出しその政治を正当化した。そういった主張は金融界や勃興したIT産業のエリートたちと親和し、「取り残された普通の人々」の反発を呼んだ。それらの人々にとって、エリート層を代表するのがヒラリー・ク

リントンだと見なされたのである。そうして、新自由主義に反発する層はトランプを選んだ、それがもうひとつの隘路だとも気付かずに。

この矛盾を踏まえ、トランプの反動的なポピュリズムに反対する時、ヒラリーが象徴する「進歩的なネオリベリズム」ではなく、本書の提唱するフェミニズムにもとづくべきだというのがフレイザーらの主張である。

「リーン・イン・フェミニズム」と「99%のためのフェミニズム」の関係は、単なる「路線対立」というよりも、以上のような構造的な把握を踏まえたものであるということを理解する必要がある。

3 資本主義とレイシズムと

本書の意義のひとつは、わかりやすい言葉で、望ましいフェミニズムの基本的立場を説明しているところである。フェミニズムと資本主義の関係性について、これほど明快に説明した例は少ないだろう。「リーン・イン・フェミニズム」などリベラル・フェミニズムとの違いは、資本主義へのスタンスにある。そのさいのキーワードとなるのが「社会的再生産 (social reproduction)」である。

社会的再生産論

社会的再生産論を研究しているバタチャリヤによれば、社会的再生産とは、生命を生み、維持し、

継続させる活動と制度を指している。具体的には出産、育児、家事、介護などの活動および住居、公共交通、病院、学校などの制度である。社会的再生産論が以上のような生を作り出す活動と制度の重要性に注目するのに対して、資本主義は、モノと利益の生産を優先させる。そして、社会的再生産の活動を主要に担うのが女性である。

またフレイザーは社会的再生産を「社会的な関係性の創造と維持」と説明し、世代間のつながりと、友人や家族・コミュニティなどの水平的なつながりを意味するとしているⁱⁱⁱ。そして社会的再生産から経済的再生産をくり抜き、分離して序列化することで資本主義は成立したとする。資本主義は社会的再生産を価値の低いものとして扱う。この社会的再生産の軽視と搾取が、近代資本主義社会における女性の抑圧の根本にあるのである。

フレイザーによれば、社会的再生産の抑圧は三段階の変遷をたどる。近代資本主義の初期には自由資本主義が社会的再生産を私有化し、二〇世紀半ばの国家統治型資本主義は部分的に社会化し、現在の新自由主義はますます商品化する。それらを通して社会的再生産はジェンダー化され、女性の労働に依存している。

以上から、フェミニズムと新自由主義、また資本主義の関係性が理解できるだろう。資本主義は、ジェンダー化された社会的再生産の抑圧なしには成立しない。特に新自由主義は、社会的再生産の商品化と民営化を推進する。医療も教育も公的予算を削られ民営化され、それらの領域の労働者の多数

を占める女性の環境は悪化する。同時に新自由主義は「男性は仕事、女性は家事」という性別役割分業を更新して「男性は仕事、女性は家事も仕事も」と変容させるため、一部の女性は男性と同様に競争に参入する。新自由主義下で女性は、再生産労働と賃労働の二重の負担強化に直面するのである。

ブラック・ライヴズ・マター

ここで重要なのは、社会的再生産の抑圧に、人種の不均衡が埋め込まれていることである。分かりやすいのが、「リン・イン・フェミニズム」が目指す女性のキャリア達成が、現実には移民女性や有色女性のメイドたちに再生産労働を転嫁することによって可能になることである。そもそも、近代資本主義自体が、奴隷貿易に始まり、植民地の略奪と搾取および黒人奴隷制によって生まれた。

バタチャリヤが指摘するように、近年しばしば言及される「交差性 (intersectionality)」論は、人種とジェンダーを分離したものとして扱い、二つが外部で交わるように認識しているが、現実にはそうではなく、二つは本質的に共に構成されている。ひとつの有機的な全体性によって理解されなければならない。

これらのことがより明らかになったのが、現在のコロナ禍だろう。グローバル化は人々の競争を強化し移動を増加させたが、代わりに社会の脆弱化も生んだ。ウイルスの伝播は世界を混迷させ、アメリカでは、とくに有色の人々の被害が大きいことがいわれている。公的健康保険のないアメリカでは、

無保険者が感染した場合、莫大な治療費が必要とされる。したがって、貧困層ほど感染リスクが高い。バタチャリーヤによればアメリカの在宅医療介護労働者の9割が女性、その過半数が有色であるという。劣悪な待遇で、「未登録 (undocumented)」の外国籍労働者も多く、仕事の掛け持ちをしている者も珍しくない。それが「エッセンシャル・ワーカー」と呼ばれる者たちの実態だ。

このような背景から「Black Lives Matter (BLM)」運動の盛り上がり起きた。BLM運動自体は、二〇一〇年代に起こされ、警察の黒人への暴力に反対し、黒人差別に抗議する運動である。コロナ禍の中、さらに運動は再燃している。アルツァは、ニューヨークのブルックリンで生じたBLMの抗議行動の状況を報告している。

二〇二〇年五月二五日、ミネアポリスでジョージ・フロイドが警官に殺害されたことに怒った人々が全米で抗議運動を起こした。ブルックリンではパークレイズ・センター前に大勢の人々が集まった。このセンターは二〇一三年に建設され、当初からジェントリフィケーションの象徴として反対されていた。ジェントリフィケーションとは、都市の中核地域が再投資・再開発により労働者階層が排除され高級化・富裕化することである。

連日この地が集まった市民は、明確なリーダーもいないまま自然発生的にスピーチを始め、各々が怒りや愛、連帯、希望、感謝、政治分析を述べ合う場と化した。例えば黒人のホームレス男性は「初めて白人が私たちの闘いを支持している」と語り、また茶色い肌のトランス女性は茶色い肌のシス男

性に「わたしたちを支持できないなら帰れ！ わたしたちは連帯する必要がある」と語った。マーチを始める人々もいた。警察の取り締まりをかわしながら練り歩くと、街中から、抗議者たちに声援が与えられた。センター前では飲み物や食べ物、消毒薬やマスクを人々が持ち寄り、分け合った。

アルツァはこれを、ケアの行為、ラディカルな、下からの共同的社会再生産だと呼んでいる。「美が街に戻ってきた」と。フロイド、ブレオナ・テイラー、ジャマル・フロイド等「軍事化されたレイシスト国家」に殺された無数の黒人、コロナで亡くなった一〇万以上の人々。死者たちへの追悼と、怒りが、人々に資本主義と国家が抑圧する自由を一瞬にせよ行使するのを可能にさせた。このような瞬間は、ほどなく既成の政党政治に吸収されたり、資本や国家に抑圧されたりする。だがこのときの可能性を様々な形で持続させ、生き延びさせることで私たちの未来は取り戻されるのである。

4 おわりに

最後に、本書がフェミニズム理論においてもつ意義を確認しよう。BLMにおける連帯を可能にしたのは「自律性」であり、これはウイメンズ・ストライキが目指しているものと共通している。

本書が謝辞を捧げているカンピー・リバー・コレクティブは、一九七四年から八〇年にボストンで活動した黒人のレズビアン共同体である。市民権運動には性差別への十分な視点がなく、白人女性中心のフェミニズムにはレイシズムへの視点がなかったため、彼女たちは独自の立場を必要とした。

コレクティブはブラック・フェミニズムの立場から、人種、性、異性愛主義、階級の絡まり合う抑圧を分析し、変革しようとした。コレクティブの起草したステートメントは、アイデンティティ・ポリティクス的重要性を記しているが、同時に、白人のフェミニストが求める分離主義（一つのアイデンティティに基づいて排他的な集団を作ること）は批判している。レイシズムの深刻さを体験している彼女たちは、黒人男性との共闘も必要だし、男性性は社会的に作られたものであると考える。生物学決定論に反対すると明確に述べ、女性の抑圧を性的起源に限定することは階級や人種の問題を無効にする

と批判している。

本書はこのコレクティブから大きな影響を受け、「女性」という立場を重視しながらも、その主体は限りなく開いていこうとしている。「自律性」を実現するためには、単一の差別に限定するのではなく、むしろ錯綜する権力関係のただなかに主体を考える必要がある。

コレクティブの主唱者のひとり、バーバラ・スミスもストライキの呼びかけに加わっている。スミスは、白人女性の多くがトランプに投票したのは彼女たちの「白人優越主義 (white supremacy)」のためだとし、白人優越主義はフェミニズムも含めた進歩的な人々をも分断しているという。「リー・イン・フェミニズム」は経済的に特権があり、シスジェンダーの白人女性には有効だが、黒人女性である自分には意味がないとして、すべての女性の権利と自由のために闘うウイメンズ・ストライキを支持している。

フェミニズムにおけるレイシズムの問題は、ウイメンズ・マーチの初期から内包されていた。本書が提起するフェミニズムがそれを超えるものであることが期待されている。

また、本書は随所で「トランス女性」や「セックス・ワーカー」といったマイノリティ女性を主体に含めている。どちらも、従来から、フェミニズムがどのようにかわるか対立が続いてきた存在である。女性から排除し、否定するフェミニストすらいる。本書が、そうではなく、ともにある存在として含めていることは大きな意義を持っている。

そして、最終的には女性だけでなく、すべての人々の「99%」の連帯を目指している。ブラック・フェミニズムや社会主義フェミニズム、クィア・ムーブメント等の成果を踏まえ、新しいフェミニズムを生み出そうとしているのである。「自律性」と「開放性」という異なる理念がフェミニズム理論を牽引してきた。ふたつを同時に模索する本書のフェミニズムにこそ可能性があるだろう。

日本は、アメリカほどのダイナミックな運動の可視化はまだできていない。しかし、「リー・イン・フェミニズム」はむしろ政府主導で行われ、フェミニズムは女性が男性以上に「活躍」し、国家と経済に貢献することであるかのように理解されている。フェミニズムが歪められたまま流通している。そしてフェミニズム内部でも、この状況について十分に認識されているとは言えない。本書は日本のフェミニズムに一石を投じることもなるだろう。

また、一般に日本には人種差別の問題はないかのようにイメージされているが、「白人優越主義」の意識は共有されているし、ナシヨナリズムは年々強化されている。何より植民地主義の歴史を払拭していない。日本軍「慰安婦」問題ははまだ国際関係に大きな亀裂を入れているし、被害女性の訴えは日々バッシングやヘイトスピーチでかき消されている。

「慰安婦」問題をめぐって日本のフェミニズムが分裂を深めていることもあまり知られていない。この問題は、ジェンダー、セクシュアリティ、階級、民族、国家がいくえにも絡まったものであり、実は本書の射程とまっすぐに重なり合っている。

マイノリティ・フェミニズムの重要性もまだ十分広まっていないが、だからこそ日本で本書のフェミニズムを伝え、ともに作り出していくことには大きな意義があるだろう。

本書が、これが必要としているすべての人々の手に届くことを願ってやまない。

注

- 1 ナンシー・フレイザー、菊地夏野訳「フェミニズムはどうして資本主義の侍女となってしまったのか——そしてどのように再生できるか」『早稲田文学』二〇一九年冬号。ナンシー・フレイザー、関口すみ子訳「フェミニズム、資本主義、歴史の狡猾さ」『法字志林』一〇九卷一号、二〇一一年。
- 2 Tithi Bhattacharya ed. *Social Reproduction Theory*. Pluto Press, 2017.
- 3 ナンシー・フレイザー、菊地夏野訳・解説「資本主義におけるケアの危機」『早稲田文学』二〇一九年冬号。

訳者あとがき

二十四歳の女性として、自分や周囲のひとびととフェミニズムとの関わりあいをながめるとき、わたしが生きている日本ではいま、やっと「ジェンダー」という言葉が同世代のあいだでも浸透しはじめ、その規範的な力によってもたらされた日々の違和感を、怒りを、しばしばその手前にあるかなしみを、言語化しようとしている段階だと感じる。ゆえに、その違和感の、怒りの、かなしみの原因をそもそも作り出している（あるいは強化している）「構造」に目を向け、それを批判するという『99%のためのフェミニズム宣言』のラディカルな態度は、多くの人にとって新しいものに映るのではないかと思う。

フェミニズムが目指すのは、けっして「女性」だけのユートピアではない。これだけ多くの分断線が用意され、ひとびとを分かとうとする力がはたらく世界において、わたしとあなたは、どれだけ理解しようとしあえるか、どれだけ想像することができるか、そしてどれだけ愛しあえるか。フェミニズムをつうじて、すくなくともわたしはそんなことを考えている。ただ、さまざまな人と手をとりあおうとするなかで、それでも「女性」というフレームを設定することが必要なのは、そうしなければ、

訳者あとがき

FEMINISM FOR THE 99%: A MANIFESTO
by Cinzia Arruzza, Tithi Bhattachaya, Nancy Fraser
©2018 Verso
Japanese translation rights arranged with
GLUS. LATERZA & FIGLI S.P.A
Through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

© 2020 Jimbunshoin
Printed in Japan
ISBN978-4-409-24135-6 C1036

印刷所 創栄図書印刷株式会社
装丁 上野かおる

〒六二一・八四四七
京都市伏見区竹田西内畑町九
電話〇七五・六〇三・一三四四
振替〇一〇〇〇一八一二〇三

訳者 恵愛由
発行者 渡辺博史
発行所 人文書院

著者 シンジア・アルツァ
テイティ・バタチャーリヤ
ナンシー・フレイザー

99%のためのフェミニズム宣言
二〇二〇年一〇月二〇日 初版第一刷印刷
二〇二〇年一〇月三〇日 初版第一刷発行

落丁・乱丁本は小社送料負担にてお取り替えいたします

JCOPY 〈出版者著作権管理機構委託出版物〉

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構（電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。

著者略歴

シンジア・アルツァ (Cinzia Arruzza)

ニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチ (the New School for Social Research) 哲学科准教授。著書に *A Wolf in the City: Tyranny and the Tyrant in Plato's Republic* (2018, Oxford University Press) など。

テイティ・バタチャーリヤ (Tithi Bhattacharya)

パデュー大学歴史学准教授。著書に *The Sentinels Of Culture: Class, Education, And The Colonial Intellectual In Bengal* (2005, Oxford University Press) など。

ナンシー・フレイザー (Nancy Fraser)

ニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチ (the New School for Social Research) 政治・社会科学科教授。翻訳書は向山恭一訳『正義の秤——グローバル化する世界で政治空間を再想像すること』(2012年、法政大学出版局)、共著に『再配分か承認か? ——政治・哲学論争』(2012年、加藤泰史監訳、法政大学出版局) など。

訳者略歴

恵愛由 (めぐみ・あゆ)

1996年生まれ。同志社大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程。専門は現代アメリカ文学、ジェンダー表象研究。BROTHER SUN SISTER MOON でベースとボーカルを担当。

解説者略歴

菊地夏野 (きくち・なつの)

名古屋市立大学人間文化研究科教員。専攻は社会学、ジェンダー／セクシュアリティ研究。単著に『ポストコロニアリズムとジェンダー』(青弓社)、『日本のポストフェミニズム』(大月書店)、共著に『戦争社会学——理論・大衆社会・表象文化』(明石書店)、『国境政策のパラドクス』(勁草書房) など。